

昭和二十四年

四七

月二十三日

發行三種郵便物
（每月一回・十五日發行可）

（通第二九九号）

慈

光

第二十六卷

第四号

次目

真宗慶歎	近角常觀	(1)
慈悲の觀世音	福島政雄	(3)
一道會の記	榎原徳草	(8)
称仏六字即懺悔	山本晋道	(14)
念仏詩抄	木村無相	(17)
攝取不捨の真言	花田正夫	(20)

真宗慶歎

近角常觀

真宗とは一の宗旨の名であつて、禪宗にもあらず淨土宗にもあらず真宗であると云うたに違ひない。さりながら親鸞聖人が初めて真宗という名をつけられた当時は、聖人の眼中では真言宗でない天台宗でない、きっと真宗であると簡びをつけて相対的に名づけられたのであろうか。私は決してそうは思わない。なる程一応はそもそも云えるが、さり乍ら今日の我々が思う様に淨土宗に向つて簡びをつけて、それに対する自分の弘むるところを真宗と名づけたというのではない。真宗という名は読んで字の如く、眞実の宗教であると仰せられたのであって、今日の言葉でいえば仏教の真髓というと同じ意味である。真宗は一代仏教の精髓である、仏教の甘味をランビキにかけて絞りあげたところが真宗である実に仏教の生粹というべきは真宗である。

そもそも真宗の二字について其源をたずねると、善導大師は「真宗もう遇いがたし」と云い、又「念佛成仏是真宗」と云われたのはじまるが、この時は真宗という一つの宗

派であつて、他と簡んで別に一宗を立てるなどという意味は勿論あるのではない。眞実に仏の恵みを我心に味わい、口に称するばかりであるが、その心中に仏の恵みを得たる信仰そのものが、即ち仏教の精髓、骨目であつて、この意味から真宗なる名称が出来ている。このように真宗という言葉は實に味が深い。この点についての詳論は本論にゆずるが、一言いうて見れば、法然上人が淨土宗を立てられた当時は、非常に強く、外聖道諸宗に対して淨土宗という一宗を立てたのであって、如何にも対抗的に見えるけれども、退いて静かに法然上人の胸中を察するに、上人の胸中に所謂淨土宗のあらわれ来ったのは全く絶対的である。

法然上人は今まで仏の恵みの無かつたところへ、絶対に仏の恵みを云わんために、淨土宗の名を立てられたのであるから、或意味において非常に極端に淨土宗を云い立てて居られるが、かく非常にきわどくなれば仏の恵みが顯われて来ぬから、かかる態度に出られたのである。上人は淨

土宗という名前を立てることが出来るか出来ぬかということまで論じ定めて聖道門の諸教を捨てて別に念佛一門を押立てられた。

これに反して親鸞聖人の真宗と云われたのは、法然上人の如くきわどく云い立てたのではなく、單に聖人の味わわれたる他力の真髓を云いあらわしたに過ぎぬのである。もつとも聖人も「聖道権化の方便」と云うようなこともあるが、これとても他の宗派に対しきわだてるよりは、他の宗旨の説くところいかんを問わず、聖人の眼に映じ来る仏の恵みの眞実を味おうた宗旨であるといふに他ならぬのである。それであるから聖人の意をもつて云えば、一代の仏教、数千の經巻は仏の恵みの眞実を種々に説きあらわしたのであって、八万の聖教もつまりは仏の恵みを説かれてあるので、それ以外に一物なしということになる。

聖人の眼中には八万四千の聖教中、この仏の恵みが肝腎である、仏教というはこればかりである、この外のものは厳密の意味でいうと仏教でない、換言すれば八万の聖教といふも唯この仏の恵みの一つが種々に現われ来つたのであるから、ランビキにかけて絞りあげて見れば、唯この仏陀広大の恵み一つになつてしまふのである。

かく云えどて外のものを捨ててしまうのではない、それは皆この仏陀の広大の恵みの中に含まれてあるのである

が、結局の生粹は仏の恵み一つである。このことは教行信証の上に充分あらわされている。

親鸞聖人が法然上人から教を受けられた有様を伝文に「真宗紹隆の大祖聖人（源空）」ことに宗の淵源をつくし教の理致をきわめて、これをのべ給うに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽くまで凡夫直入の真心を決定しましましけり」

と云うてある。聖人がこの時はじめて仏陀広大の恵みに気づいて心中に味わわれたものは全く一代仏教の精髓である。一代仏教は含有的に仏の恵みを説いたのである、ただにそれのみでない、見るもの聞くものこの人生万般の事ども皆悉く仏の恵みの外はなかつたのである。かく信仰の円熟したところから教行信証を著述されたのであるから淨土真宗というは一つの宗派を説くのでなく、唯仏の恵みの生粹を傾けられたので、これが本来の眞実の宗教である。よって聖人は『眞実の教、淨土真宗』と云うて置かれた。私もこの眞実教に遇わせて頂き、広大の仏教を喜び、口を極めてこれを讀歎せざるを得ないのである。一体宗教のかいことは不似合のことであつて聖人の上で見ると全く慶喜讀歎される計りである。私も心に味わわせて頂いていふ仏の恵みの泉を味わい之を讀美したたえるより外は無い

慈悲の観世音

世音

福島

政

雄

西洋で美術館を見てまわって聖母マリヤの絵に深く感じラファエルが描いた聖母の絵には殊に豊かに深い感じを受けた。日本に帰つてまだ西洋の印象が鮮かな間に、仏画や仏像に親しみ始めた。それは私が四十歳を越えた頃であつたから既に晩（おそ）かつたけれども、それでも西洋の印象との対照があつたので、一種の鮮かな趣はあつた。

聖母に対しては東洋では觀世音である。觀音の信仰は東洋において最も広くひろまつていると高橋順次郎博士からうかがつことがある。聖母は女性であるが、觀音様は女性ではない。しかし女であるかのように思われている。それは觀音様が仏陀の慈悲の象徴だからである。觀音像は日本全国全体では有名なものだけでも相当に多いと思う。私は多くを知らない。幼少の頃に郷里の熊本で、松雲院といいう小さな寺の御本尊の觀音様に、祖母や母に連れられて参つたことはあつたが、しかし觀音様についてこれという感じも持たなかつた。

が持つ力である。

それはキリスト教と仏教との趣の違いであつて、寺院の建築の上にもこの相違が認められる。キリスト教寺院の代表的な建築といえば、ゴシック式の建築であろうが、ゴシック式の建物は、その全体の形が天に向つて憧憬する形である。この地上の生活を否定して、天国にあこがれる姿である。然るにわが国の仏教寺院の建物は、この地上に落ちついて周囲の自然とよく融合している。奈良や京都の有名な寺院、法隆寺でも、大仏殿でも、興福寺でも、知恩院でも、八坂の塔でも、清水寺でもそうである。そこに仏教の心持がよく現れているように思われる。

人生は苦惱煩惱の世界である。仏教殊に淨土教では忻淨厭穢（ごんじょうえんえ）などという。美しい淨土を願つてこの娑婆は苦しい汚れた土であるといつて厭う。然るに穢土（えど）であるこの人生に最もよく落着かせるのは、その淨土教の信仰である。そこには不思議な心境がある。

ここでたちかえつて觀音様のことと思う。觀音様は人間の世界にまで低く下りて来る慈悲の力である。然らばその姿はどうであるか。私どもがお寺で拝む觀世音の姿は様々である。私は大和の法隆寺の觀世音にまず親しんだのであるが、最初から親しむことの出来たのは百濟（くだら）観音であった。童顔であつて、その姿は少女を理想化したよ

西洋から帰つた後、京都東山七条の博物館で山越の三尊の絵を見た時には、深い感銘を受けた。それは源信僧都の筆であると伝えられているもので、掛軸になつてあるものが殊によかつた。その絵は京都の東山かと思われる山が描いてあつて。その山の向うには琵琶湖の波かと思われるような波が描かれてある。その山の上には阿弥陀仏の半身のおすがたが見える。その右と左とに勢至菩薩と觀音菩薩とが山を下りて来られる。それは私共人間の苦惱の世界へ静かに下りて來て慰められる姿のように見える。

この山越の三尊の絵の全体の感じは、月の光とでもいうような感じである。月の光が涼しく人間の世を照らすといふような感じであつて、これを見ていると、心が次第に静まって来るようと思う。聖母の絵は雲を踏んで立つような姿を描いてあり、それを見る人にむしろ憧憬の心を誘うようであつたが、この三尊の絵は人の心を落ちつかせる。苦惱の人生に静かに落ちつかせるというのが、この三尊の絵

うな丈の高い觀音様である。誰でもこの觀音像には最初から無限の親しみを感じる。然るに夢殿の觀音となれば、非常に威厳のある姿であつて、直に親しめるものではない。場合によつては恐ろしいような感じさえする。中宮寺の御本尊の如意輪觀世音は、また一種の魅力を感じさせる觀音様である。半跏思惟（はんかしゅう）の姿と見て、右足の足先を左の膝の上にのせて、右の手先で頬を支え、瞑想の有様である。このように法隆寺、中宮寺の有名な三つの觀音様について見ても、その姿はそれそれに違う。奈良の法隆寺の御本尊は十一面觀世音であつて、女性の姿と見られるが、威厳ある女性の姿である。光明皇后のお姿をうつしたものという伝説になつてゐるが、体の恰好は童形である。

法華經の第二十五普門品（ふもんぽん）すなわち觀音經を読んで見ると、普門示現といふことが説いてある。觀音經ではそれを三十三身といふことで現わしてある。種々無量の示現を仮に三十三身として表現したものである。この場合、觀音様は木像や金銅の像や絵像ではなく、生きたいのちである。私どもは人生至るところにおいて觀音の示現に接する。

何が生きた觀音の示現であるか。私どもは生きた人々のさまざまの場合の色々のすがたに、そのすがたや、そのいのちの動きを縁として、仏陀の慈悲を感じる。この時に縁

となつた人は、私どものためには観音の化身である。私どもはこの苦惱の人生にありながらも、観音の化身に値遇することが多いので、この人生に温かみと潤（うるお）いとを感じる。そこに私どもは苦惱の人生に落着く心持を開かれる。

観音様の御利益ということが観音経には広大に説かれてある。世音を觀ずるというその名の意味は深いのであらう。そして私どもの心に畏れない心を与へられる。施無畏者という。観世音を怠すれば、貪りや瞋りや愚かさなどの煩惱は退散する。海上で暴風に出会へても、観音を怠すれば風がおさまる、盜賊に出会へても、観音を怠れば盜賊が逃げてしまう。たとい非常な難儀に陥つて首の座に直り、首を斬られようとする時でも、観音を怠すれば、その刀剣が段々に折れてしまう。観音の妙智力というものは、あらゆる人々の難儀を救うものであると説かれている。

かような御利益説をそのまま受取れば、観音信仰は迷信となる。実際世の中には迷信的観音を信仰している人が非常に多いようである。しかし観音經の眞実の意味は仏陀の慈悲に包まれる身となれば、如何なる大難にも安んじてこれに処することが出来るという意味であろう。観世音菩薩とは、私どもがこの人生のさまざまの縁に触れて感ずる仏陀の慈悲のひらめきであるから、この慈悲のひらめきを

感ずるので、私どもは苦惱の人生にも落着きを得て行く。そこに観音様の御利益がある。慈眼視衆生、福寿海無量という観音様の力がそこにある。

観音様の化身としては千三百年来、わが国民に仰がれている偉大な人物としては第一に聖徳太子である。平安時代の中頃からはわが國民は聖徳太子を観音様の御化身として仰いでいる。これは太子の生命に無限の慈悲を感じているのであって、わが國民は歴史の上で見れば、苦しい境遇に陥つた時には、太子を想い起すことが非常に深かつた。平安時代の中期以後には、世の中が次第に乱れて来て生活上の苦しみが多くなっている。この頃からわが國民は太子を深く慕うようになって、太子を観音の化身として仰ぐようになった。磯長の太子廟に伝えられている太子廟窟の銘には、太子のお言葉として、我身は救世（くせ）の観世音という語がある。

その後、鎌倉時代に入つて、太子に対するこのよだんな信仰は更に深くなっている。その中でも最も純一な情から、太子を観音の化身として慕うた人は親鸞聖人であつた。その皇太子聖徳奉讃には、太子を父の如く母の如くに仰ぐ心持があらわれている。親鸞聖人は四歳で父に別れ、八歳にして母を亡くし、中年関東での生活では、やや幸福であったかと思われるけれども、晩年の家庭生活では長子善鸞の

違信問題で、悲痛なものがあつたようであるから、そこに觀音の化身聖徳太子に深く親しむ心持が無限であつたのであらう。法然上人が勢至菩薩の化身として智慧の人であつたのに対し、親鸞聖人が慈悲の觀世音に深く親しまれたことには深いわけがあると思う。

六角堂の夢の記というのは、聖人の生活の上に重要な意味を持っている。六角堂の御本尊は觀世音である。聖人入滅の直後に惠信尼が息女に送られた御消息によれば、聖人は若い時、多分二十九歳の時に、比叡山を出て百カ日六角堂に籠る願を立て、その九十五日の曉に聖徳太子の廟窟の銘文を口ずさんで居られると、夢とも現（うつつ）ともわからず、觀世音の御示現があつた。これは近角常觀先生の御解釈によつて述べるのであるが、その觀音の御示現というのが、御伝鈔第三段に出ている四句の偈文である。

行者宿報（しゅくほう）にして設い女犯せんに

我れ玉女となりて身犯されん
一生のあいだ能く莊厳し

臨終には引導して極楽に生ぜしめん

この偈文の解釈を避ける人もあるが、囚われないで解釈すれば、聖人の若き日の性的煩悶が觀音の夢想の告といふ形で現わるものである。そこには夢がまことか、現がまことかという問題もある。そして夢にもまことが現われる

前にも述べた惠信尼の御消息のあとの方に出てゐる常陸の下妻のさかいの郷で見られた惠信尼の夢では、良人の聖人を觀音の化身と見て居られる。そしてそれは惠信尼が誰に

ということは事実である。この四句の偈文には、結婚問題についての聖人の眞実な心持があらわれている。すなわち觀世音の慈悲を異性に期待する心持がある。しかし単に甘い心持ではなく業報の自覚がある。女犯（によぼん）は宿世（すぐせ）の業報であるという。結婚するというのは、遠い昔から続いている業報であつて、そこに悲痛なものがたり、決して甘いことではない。その悲痛な結婚生活の根源をうるおす慈悲を求める心持がある。この頃聖人に女性の相手があつたかなかつたか、はつきりわからないけれども、叡山で堂僧をつとめて居られたというから、叡山においては、宗教的な真面目な求道分子であり、性的に乱れるという風ではなかつたに相違ない。そこでいよいよ觀世音が心の問題となつたのであると思う。

聖徳太子の文が觀世音の示現の縁となり、聖人の名、善信というのがここに出ており、父とも母とも慕われた太子の文に導かれて、觀音の示現にあづかられたというのであるから、觀音の化身としての太子を縁として、觀音の化身としての配偶者を求めるという聖人の心持がここにあると思われる。

も話さないで、聖人の入滅の報せを得て後に、はじめてその息女に打ちあけられたものであるから、これも軽い気持ではない。或はその夢の前には結婚生活の痛切な体験があったかもわからぬ。人間の生活には百年の春のようなことがあるものではない。常に問題があり波乱があつて、その間に平穏な時がとびとびのようにある。そこに観音様のいのちがある。

近角常觀先生に觀世音の贊がある。

山間忽ち落つ花一輪

長江万里水上に浮ぶ

飄然去來し彼岸に至る

人生百年光悠久々

山間に忽ち落ちた花一輪が、万里の長江に浮び飄然去來して彼岸に到るとは、私共一人一人の有様ではないであろうか。人生の長江は限りもない万里の流れである。私どもはそこに流れ去つて、何處に行くかもわからないでいる。長江の流れには波乱がある。親子、兄弟、夫婦、朋友などの、さまざまの関係の中に苦しみは多く、楽しみはむしろ少なく、嘗々として世を渡つてゐる。その間には煩惱に縛られて何とも言えない日々が続く。そのままであるならば人生は実に煩惱の牢獄に過ぎない。私共はその中に入れられた死刑囚である。永遠に暗い。長江の波は濁流である。

永遠に暗い牢獄の窓下を洗う。否、その牢獄そのものが波に漂うて流れているかも知れない。
しかしながら、人生はそれだけのものではない。その暗い中に閃きのように射す光がある。その悲痛の煩惱の中にこれを温め融かして行く慈悲の力が感ぜられる。否煩惱そのものを転じて長江の濁流を遂には澄まさずには止まぬ清泉が不斷に長江の隨所に湧いてゐる。それは私共が悲痛に当面した時に念佛の声の中に味おうものであり、またその念佛の中でこの人生に触れて行くときに、縁に触れて感ずる悠々たる光の感じである。それを近角先生は、人生百年光悠久々と言われているのではないか。そこに觀音のいのちの流れがある。

私どもは、家族の上にも友人の上にも、または路傍の見も知らぬ人の上にも、觀世音の化身を感じる縁がある。人生は前生の業報の世界であり、悲寥（ひりょう）の境涯でありながら、さまざまの縁に触れて、仏陀の大慈悲を生きたいのちとして感ずる。それは人生の曠野におけるオアシスのようなものであるが、そこに私どもは生きた觀音様の化身に遭遇する。このようにして、人生百年光悠久々、私どもは苦惱の中に落着いて人生の行路を辿つて行くのである。

一 道 会 の 記

榦 原 德 草

次いで花田先生のお話の大要を誌します。

毎年この席にお坐り下さった白井先生のお姿を拝することが出来ませんけれども、先程から種々お話を承りながら先生の活きた真生命が流れている、そういうことを非常に有難く感じております。今日、私にとりましては、池山先生も近角先生も白井先生もお三人が一つに融けて導いて下さるのを覚えます。

さて、私は白井先生に直接にお導きを頂きましたのは終戦の前後からであります。先生は大正の頃名古屋の愛知医学専門学校を教えていましたが、當時信合会の責任者となっていた関係から、お念仏の御縁の方々が居られ、年一回程お立ち寄りになつていました。お宿は佐々木小児科医院で、大橋、今村、岸本様方が寄つて居られました。ことに私の忘れ得ませんことは、聞信会で二三度歎異抄の講義を聞かれた横地様が、十数年前のことでありますがそ

突然白井先生のお話の会に来られて次のような感話を述べられたことです。「私は学生時代に數回お話をお聞きしましたが、そのまま忘れるともなしに忘れ去つてしまつた時大病のため伊豆で養生中に、医師として沢山の患者さんを送つたことがあるが今度は自分もその数に入らねばならぬのか？」とそれが苦になり、生きるべく失つて下さいました。この人と思うと、あなたは何をよるべく生きていられますか？」と尋ねましたがお答えは貰えず、聞々の中にフト歎異抄を思い浮かべ、取り寄せて読んでいるうちに、お念佛が唯一の生命の支えであると気づき、はじめて動乱の胸に光明がさしてきました。思えば先生のお教えを頂いてすでに三十余年、この間一度も暑中御見舞も賀状も差しあげませず、今日はおわびとお礼にまいりました云々」と念佛裡に語られました。又、その席に池山先生の一心正念直来△オネガヒダカラスグキテオクレヨ△の色紙を見出されて横地様がどういう意味ですかと尋ねられたので、私がそ

れは迷い児。を待つ母親の切なる願いのように仏様が迷妄の私共を待つて下さる切なる悲心であります、と答えましたら、それを知らなかつた、その仏様がましますことを知りませんでした……と一入念佛を喜んで居られました。

このことは、真実なものは一度触れると消えることがない尊さを知らされました。和讃に「本願力にあいねれば空しくすぐる人ぞなき」とあり、また聖人の左ガナに「実といはかならずもののみとなるをいう」と、生きたおまこと、不滅の尊さを讀えていられます。横地様が三十年、四十年後に、一度ふれた歎異抄に育てられてやがて信の華を開けましたことはその顯現であります。

も一つ、當時白井先生は広島文理大学の教授をしていらされた頃、戦災で焼野原になつて人々は衣食住を求めて右往左往して心の支えを失つた中に聞法の会を催し先生をお迎えしました時の名古屋駅の一場面です。佐々木、大橋、今村、岸本様方がお迎え下さいました。当日非常に風が強く寒かったです、佐々木様が御自分のマフラーをとつて先生に掛けられる、また先生が電報用紙を出されると今村様が駅の郵便局に走つて行かれます。そういう有様をじつと眺めながら、すでに大正七、八年頃に学んだ方々が、先生を歓び迎えられるのが、恰も孝行の子が嬉々として親に仕える趣きにふれました時、遠ざかれば疎んじ、離れれば

に落ちても、障りの多い中に徳の多い、深い喜びが湧き出るのです。この教が生きて存在する限り日本は必ず立ちあがるでしょう」と坐を正して答えられました。只今でも日本列島沈没といふような説も聞きますが、嵐の夜の海に羅針盤が私共の行方を明示するように、真実の教法が心の羅針盤となって行方を照らして下さることを確信を以てお答え下さったのであります。

最後に、「自照」の先生のお言葉に、還相廻向のことにふれていらました。その中に「世間の人が、還相の菩薩を経典に説かれているけれど、そうした人々を地上では見出せないではないかとよく言っているが、それは違う、信心の眼が開かれると無数の還相の菩薩が仰がれて来る。自分はお導きを蒙つたよき師の上にそれを拝する、但し御生前は人間的な形骸に障えられて仲々見出されないが、そうした方々が淨土へ還られたあとからハッキリと、自分を救うために観音菩薩となり、或は勢至菩薩となつて影現して下さつたと心から肯けるようになつた、そうした菩薩方の教育で聞く気がおこつたのです」というようなことを書き残して下さっています。このように御自身が還相の菩薩に導かれて、やがてまた還相の菩薩としての永遠の活動に入つて下さることは、私共に大きな光明を与えて下さるのであります。

忘れる世に、地下水が交流してやまぬような不滅不斷な真実がある、時間も空間も障げられない永遠のいのちがあると非常に深く感じました。

先きに井上先生からお話をありました、白井先生はお母様が早く亡くなられた、その事によって自分がたすけられるだけでなく亡きお母様がたすからねば本当に落着けなかつた、と仰言つたが、最近法然上人の大經釈を読み、三十五の女人成仏の願について詳しく長々とお述べになつていられることを思い併せました。法然上人のお父様は横死され、お母様が國に残られた。上人は四十三歳に念佛の玄意を得体されました、お母様の救われる道が見出されなければ落着かれなかつことであります。三十五願に女人成仏の誓いを見出され、限りないお喜びから書きのこされたことであります。それはそのまま「男女、老少、善惡の人をえらばれず」一切の人々も助かる大道であると展開されているのであります。

次に、戦後の混乱期に教育の方向も失つた友が先生にそれを訴えた時、「米国は自分達のよいと思うことを日本にも強く勧めるでしようが、日本は決してフイリップンの様な国にはなりません。それはよき教え、千三百年前に出世された聖徳太子の導きがあり、八百年前にお生れになつた鷲聖人の真実の信の浸みこみがあります。この教えは逆境

私も三十代、四十代の頃は、還相の廻向ということも、極く軽く聞いておりまして、現実の活動に中心をおいて考えていましたが、七十にもなりまして老苦、病苦、死苦といふことも他所事でなくなり、一期一会ということもしみじみと知らされますにつけて、生のよるべと共に、死の帰するところが同じ重さをもつて大切になりました。聖人は教行信証のはじめに「往相の廻向、還相の廻向を擧げられて、その二本建を緯（たていと）とし、教行信証を経（よこいと）とされて、真宗の本義をあかして下さります、所謂、生死を超える大道を公開して下さつたことをあらためてありがたく仰いでおります。

近角先生が脳溢血でたおれられて一年の療養をなさつた時、お見舞された池山先生に「自分は生涯、信界建現、信界建現と叫んで來たが、教行信証と歎異抄さえあれば、真宗は不滅であり、思想がどんなに惑乱しようとも必ず帰すべきところに導いて下さる云々」と満面に笑みを浮かべ仰言つたと伝聞いたしました。今や近角先生、池山先生、そして白井先生と相次いでお淨土へ還られました。が、念佛裡に仰ぎますと、お三人が一つにとろけて、或時は観音、或時は勢至と顯現されて私をお導き下さるのであります。これで終らせて頂きます。

次に松本解雄先生のお話の大要を誌させて頂きます。

先程から井上先生、日下部先生、花田先生によつてお話を下さつて余す所がないので蛇足になりますが若干お耳をかけしたいと存じます。

白井先生に初めてお目に掛つたのは確か昭和十五年と思

います、神戸の広徳会館と思ひますが、佐々木円梁先生にお会いになるため、井上先生とお二人で汽車に乗つて居られたのにお会いしました。京都から大阪の方向に進行中で左の方に和服姿の白井先生が井上先生と並んで話しておられ、私は離れた所でお話の内容は解りませんが、倫理学のお話ではなかつたかと思います。三十五年も前の事で、先生は五十二、三才であられたでしようか。

その時、神戸の三宮の広徳会館で夏期講習会があつて、先生の外に竜大の先生等も出講され、その時始めてお講話をお聞きいたしました。池山先生にはそれより十年程前にお目にかかるつていきました。

昭和十五年に画帖を持つていて揮毫をお願いしましたが、自照会の長森先生、又は村松さんは短冊をお願いされました。私には和歌を書いて下さつたのですが、先程の井上先生のお話を承つておりますと、先生の一つの転期と申しますか、その御心境の下にあってのお歌かと思われま

敷に帰られて「声が凍つたよ」と申されました。その凍つたという声の表現は平坦な序述でなく、文学的とでも申しますか表現の妙味を突き出されたのを覚えて居ります。

又、親鸞会の人で林田さんが奥さんをお産で亡くされ、その野辺の送りの時に先生は礼服で靈柩車を鳥丸通りで見えなくなるまで見送つておられる、そのジッと見送つておられたあの御姿を想い出します。

先生は萩がお好きでした、ここ淨住寺さんの名号碑の庭にも沢山萩が植つておりますが、先生の蓮華谷の御宅には萩が一杯で、私達が日曜に数人で御伺いしますと、先生は大島つむぎの着物を着て玄関までお迎えにして下さる。

昭和何年でしたか、毎年のことですが正月二日に御親族も一緒に二十人ばかり集まつて御馳走になりました。その集りを「一つの会」と呼ばれました。普通の会名と違つて異様に覚えましたが、この「一つ」というと、「一道」は先生の号ですが、この一つということが親鸞聖人の信仰では重要なものです。そういうところがお考へにあつたのではないかと思われます。聖人には、多少言葉は違つても、例えは「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなし心にありけり」おなしこころ、これは一つのこと、若し違つたら大変なことです。仏凡一体、如來と私が一つ、一体ということ、機法一体もそうです。單に縦の関係だけでな

す。「淨きみ國うち建てましし阿弥陀仏 本つ誓いをおろがみまつる」とありました。淨きみ國とは私共の心の穢惡の極に淨きみ國、先生はきびしく御自身を省みられて「天に踊り地におどる」でなしに、そういう方向とは逆に、お叱りを蒙る方向において「本つ誓いをおろがみまつる」と仰言るのであります。

親鸞聖人も「悲しきかな愚禿鸞云々」とも、「慶ばしきかな云々」とも述懐していられますように宗教の世界ではこの光りと闇との交錯と云いますか、現実の我々の上に光りを注いて下さるのであります。白井先生は常に外は柔らかく併も内は厳しい、先生の信昧を今にして必々と改めて知らされるのであります。池山先生の事については何回も申すことですが、白井先生とは御性格について違つた面があると思います。昭和四年でしたか、池山先生が谷大に転じられたので京都の寺町二条の鍵屋というお菓子屋の喫茶部にお招きしたことがあります。我々京都学生親鸞会の者がお待ちして居りますと、向うから奥様と一緒に来られました。先生は何時もステッキをお持ちになつて、鳥打帽をかむり悠々と歩いて来られる、そのお姿は今も鮮やかに残つております。京都での御講演は高倉会館、顯道会館、下総会館などで拝聴しました。又奈良の淨教寺の御講演も参聽しました。それは冬の大変寒い日で、講話を終えてお座

く横の関係でも一つで、御同行、御同行と、縦横無尽につである、これが聖人のお教えのかなめのお言葉ではないかと思います。恐らく池山先生はそんな意味から「一つの金」と名付けられたのではないでしようか。

そこで、先生の御姿、ここにも御写真がありますが、髭を生やして、お話を承ると温いものを感じます。白井先生とお会いした時の感じとは違うんです。白井先生は内は厳しいものがあつても温容慈眼、柔かい感じですが、池山先生は最初の印象は恐らく厳しい、何か寄りつけない、然しお念仏に生きられる先生は外見の厳しさに拘わらず、私達と全く一つです、同信同朋の感じが深い。これは両先生だけではなく、私も高等学校時代に近角先生にお会いし、白井先生には京都の宮地様のお宅でお会いしましたが、その外真宗の鋤々たる先生方には大抵お目にかかりましたが、その全体を通じてみましてもお念仏によって生かされている人々、先生方でなくて所謂御同行たち、皆結局一つであるということが思はせられるのであります。「一つの会」について思うことを述べさせて頂きました。

さて、今日は白井先生、池山先生の追憶の会であります、遠く九州、四国、東京から皆さんお集りでありがたいことです。私も現在居ります四国の高松からまいりましたが、これからお別れの時がまいりました。御別れには「御

身体を大切に」とよく言いますが、何で「お心を大切に」という言葉を使わないのでしょうか……。その方がもつと大事なんですが……。これで失礼します。



一道会の御法話はこれで終り、例年のように精進料理の食事で、毎月集つて下さる静坐会の人々や、古くからの法友達が忙しく御勝手と座敷の間を行き交う。今までの静肅と緊張がにわかに解けて和やかなざわめきで満ちる。

今年はそれこそ一期一會の氣持が身に迫る老境の私等夫妻の考え方で、三十人位は泊つて頂いて法雨に浴して貰おうと思い、蒲団も借りて用意し、男の方は観音堂に寝て頂くことにして、ゆっくりとお念佛の慈雨に滲透して頂くことにした。夜遅くまで語り合つて下さる人々や、帰路につく人々、まことに一道会は年に一度の報恩講で、お念佛一つのお働きであり御催おしで建現された御廻向の御蔭である。翌朝も沢山の朝食で賑やかなことだった。午後になるまで名残を惜しんで残られた数人の法友を門の外まで送つたのは午後三時頃だったろうか。

会を終つてから私等家族は疲れを覚えた。然し快よい疲れ、有難い疲れである、思い起しては胸温まる疲労感である。常日頃は愚痴の湧出に疲れるが、こうした仏の慈光に浴したそれが消され流されて又喜びの疲れが出てくる。ひ

もじくて苦しみ、腹一杯たべて苦しくなる、人間という救いのない生命は仏陀の善巧により威神力によらなければ、そして往生淨土の道がなければ、又彼土淨國が建立されていかつたなら眞実の安らぎはない。聖人が、略文類の念佛正信偈に「西方不可思議尊」と讚仰されたお心が私を光被して下さる。そこへの往生の道である。

「穢を捨て淨を願い、行に迷い信に惑い、心昏（くら）く識寡（さとりすくな）く、悪重く障り多きもの、特に如來の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯（こ）の行につかえ唯斯の信を崇めよ」

との聖人の悲心切々、悲涙をしぶられての呼びかけが胸に滲みて拝されることである。

歎異抄第二章に聖人は、関東からはるばる訪ねて来られた同行、再会を期し難い対面で、その人達の問い合わせを明示され「ひとえに往生極樂の道を問い合わせかんがため」と、質疑の本源を明るみに出して、居すまいを正して目のつけどころを指示して下さる。そして「親鸞におさてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せこうむりて信する外に別の子細なきなり」と、聖人御自身がよき人、法然上人から聞きとられたお念佛一つを独語されつつ打ちあかして下さる、その尊容と慈悟が仰がれてくる。来秋の会まで生命を大切にしたいものです。

称

仏

六

字

即

懺

悔

山 本 普 道

真心徹到するひとは、金剛心なりければ
三品の懺悔するひととひとと宗師はのべたまう

三品の懺悔

これは善導大師の御教化を親鸞聖人が御和讃に歌つて、その御育ての御恩をよろこばれたものであります。三品の懺悔というのは、自力の修行をして自分を淨らかにねりあげて仏になろうとする人々の、最も大切な修行である懺悔の品柄に三通りあるのをいわれたのであります。

上品の懺悔というのは、一番尊い本当の懺悔でありますて、これは自分の罪障の深さにおののいて、両眼から血の

涙を出し、体中の毛の穴から血がふき出して、生きて居られぬ程切迫した懺悔をするのであります。久遠劫来、たつたいままで自分の流转して来た罪業深重のすがたが本当に

見えてくると、こんな深刻で悲痛な懺悔をせずには居られないのが私共の現実であります。かかる深き罪の意識と懺悔の行が出来るところまで体が浄化され、魂がめざめて

来ねば仏にはとてもなれませぬ。そしてこれから先、まだまだ声聞、緣覚と進んで、菩薩の段階五十一段を経てやつと仏になる。それには無限の修行を要するのであります。

次に中品の懺悔というのは、両眼からは涙が出て、体中

が懺悔の念で燃えてあつくなつて、全身汗だらけになる懺悔のことであります。

次に下品の懺悔というのは、ほんの懺悔の行の入口で、これは両眼から涙を出し、体中が恥ずかしい念であつくなつて汗が出るのであります。

智 日 行 足

天地法界の御恩を見出せる歎仏の眼、三品の懺悔を修する行の足、この智日行足こそ、私共を仏にまで高めて行くたった一つの力であります。

因なくして果はありません。成仏の因なくして成仏といふ果の来る筈はありません。他力の救いというも、決して因が我になくて、果を得るというような非合理なことで

ある筈はありませぬ。然れば私はどうしたら救われるのか、

智目缺け行の足無く、永劫惑業苦（わくごっく）を輪廻流转する外なき私はどうすればよいのか。歎仏の心なく、懺悔の心なき私はどうすればよいのか、歎仏懺悔は信の内容であります。この信なき私、信じ得ざる私はどうすればよいのか。

ここに如来の悲願があります。名号廻向の救いがここに成就されてあります。

如來の作願をたずねれば 苦惱の有情をすてずして廻向を首としたまいて 大悲心をば成就せり

如來はここに作願して苦惱の私に廻施せんとして清淨真実心を南無阿弥陀仏と御成就下さいました。これが聞の一念に私のものとなつて下さいます。如來の御真実心が、宿善開発して、名号のいわれを聞き聞く一念に私に徹到して金剛心となつて下さいます、これが一心であり、淳心（じゅんしん）であり、決定心であり、相続心であります。

この初起の一念は必ず後念（ごねん）に相続して私の南無阿弥陀仏の生活が始まります。この如來の聖なる力によつて穢惡の私が、転化せられてこのまま往生成仏の一路を辿らせていただくのです。この人の、大信海より流出する一声一声の念佛は、これ生ける如來が、この人の口から流れ出て下さるすがたであります。

しよう。たくさんの御恩を見落したまま、感謝どころでなく不平不満不服を言って死んでゆく私であります。思えば悲しいことであります。

自己の三世の愚惡を見るまことの眼をもたぬ私に、何でもまことの懺悔が出来ましよう。三品の懺悔などとは思いもよりませぬ。

九十九の懺悔はしても、致命的な最後の一つは死ぬまで打ち明けて懺悔し得ぬのが、私の正体であります。誤問かし、弁解し、云いのがれて生きる外すべを知らぬ私です。

まことの懺悔が救いの道そと知らせてもらつても、どうしてもこの口、この心が、恐ろしい罪と汚れを懺悔させぬ私であります。

かかる私の口から、何もいうな、みんな知つていい、よしよし、それなればこそ、つれてゆくぞ、我をたのめと、如來は御名において私をよびたもう。

ああ、御恩を知らず、罪を知らず、歎仏もなく、懺悔も行じ得ぬ私の口から、南無阿弥陀仏は朝な夕な流れ出していやでもつれてゆくぞと呼びたもう。

何も云わず、南無阿弥陀仏と、もたれかかり両手をはなす外はありません。

ただ念佛

限りなき御恩をおもい出しては南無阿弥陀仏、限りなき自分の愚惡にぶちあたつては南無阿弥陀仏、嬉しい時も南無阿弥陀仏、悲しい時も南無阿弥陀仏、何とも思わぬときも南無阿弥陀仏、ねてもさめても行住坐臥、時處所縁をきらわず縁にふれては南無阿弥陀仏。

「称仏六字」というは南無阿弥陀仏の字を称うるとなり「即歎仏」というは即ち南無阿弥陀仏を称うるはほめたてまつる語になるとなり、また「即懺悔」というは南無阿弥陀仏をとなうるは即ち無始よりこのかたの罪業を懺悔することになると申すなり（尊号真像銘文）これは祖師聖人の御釈であります。この即の字を味わわれた聖人のお心に注意せねばなりません。即ちとは、称える六字がそのまま、私が手細工しなくとも、まことの感謝と懺悔になつて下さるぞというのであります。まことの感謝の心なく、まことの懺悔をなし得ざる私であることを仏かねてしろしめして、いつしか真心徹到して下さり、信心となり念佛と流れ出でこれはそのまま十方法界の仏恩を謝し、久遠の罪業を懺悔する力と働いて、私を限りなく浄化し向上させて仏にまで育てあげたもうのであります。

まかせる一

御恩を見る眼のない私にどうしてまことの感謝が出来ま

求道用心集 源通寺

攝取信心

信心攝取の次第を知つて、攝取信心の次第を知らず。松明（たいまつ）を持って狐つきを探がす。捕えた狐つきをその松明で護つて帰る。

「往生の心に疑いなくなり候は、攝取せられまいらせたるゆえとみえて候」（未灯鈔）

香樹院師曰く

「この弥陀が護つているゆえ、疑うな云々」
お与えが先で、御勧めが後、「弥陀の名号あたえてぞ」と。仏は一の手、私は二の手。このこと忘るべからず。いつも下さる／＼と心得べし

辭世

聞きざしとは、そのままということ。仕上げのいらぬこと、今をも知られぬ至極短命の機を、もらさぬとの大悲ゆえ、聞きざしということまことに尊し。
ききざして今日はこの世をかしくかな

定散のかざりをしてまるはだか
ただ頑力にひかれてぞゆく

かしこ

念

仏

詩

抄

木

村

無

相

ねんぶつの中
どれだけ
迷うても
ねんぶつの中

なにもかも
空しとおもう
わがムネを

称えても
称えなくとも
ねんぶつの中

そとかいいだく
ナムアミダブツ
なにもかも

信じても
信じなくとも
ねんぶつの中

空しけれども
ナムアミダブツ
なにもかも

なにもかも(二)

美しと

おもわるる夜ぞ

しづかに

ナムアミダブツ

お聞かせだ

ナムアミダブツさまは

お聞かせだ

念佛

そのまま

お念佛

そのまま

お念佛

そのまま

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来さま

ひとり満ち足りて

ご信心さま

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ご本願さま

花咲いた

わたしのムネに

しづかに

花咲いた

お聞かせ

も駄目であるが、自分に至誠が足らなかつたためである。このような不誠実な者は生きてその甲斐がない」と獄中で絶食して死を待つように決意せられました。

この時、父上や叔父上が、理をつくして絶食をやめるようと言葉を極めていさめたのであります、先生の決意を動かせませんでした。そうした絶対絶命の時、母上が食物を調べさせて、次の手紙をとどけられました。

安政六年正月二十五日

母、杉滝より

一寸申し参らせ候。そもそもいかが御くらしなされ候やさきほどにふりよ(不慮)の事うすすみみに入り、あまり氣ずかわしさに申し進じ参らせ候。

きのうよりは御食事、御たちとか申すことのよし、おどろき入り候。万一千にて御はてなされ候ては、ふこう(不孝)第一口おしきしだいにぞんじ参らせ候。母こともやまいおおくよわり居り、ながいきもむづかしく、たとえ野山やしき(野山獄)において候ても御ぶじにさえこれあり候えば、せい(勢)になり力になり申し候まま、たんりよ御やめ御ながらえのほどいのり参らせ候。此品わざわざととのえさし送り候まま、母にたいし御たべ頼み参らせ候。

めで度かしこ。

大様(幼名、大次郎の略) ははより

先生はこの文を見つめられるなり、不誠実で萬事皆非の身を微塵もとがめたまわらず、「わがために短慮おんやめ云々」言々悲涙ある心にうたれ「われあやまり、順ということを知らなかつた」と心がひらけ、今まで自分の意見ばかりに固執して、母のまことに隨順することを知らないかつたと慚愧されて、食事をとりはじめられました。然し弾圧は益々強く、江戸に送られて安政六年十月に刑死されましたが、その辭世の歌は

親おもうこころにまさる親ごころ

今日のおとずれなんと聞くらん

とあつたことは誰もよく知るところであります。

どこでどうしていようともわが子をいのちにかけて念じつづける母の悲心の徹到、そこに絶望の底に沈んだ先生の心に灯火が点じたのであります。

又私の忘れる事の出来ない癱患者の明石海人の詩に、

「癱」

十年前 隣人が私の生存をにくんだ
五年前 はらからが

今では 自分自身が
残るはただ一人の母親だが
涙ながらに生きていよという

海人は絵が好きで、療養所に入つてからも絵を描くこと

には「警察はするい、親を呼んだりして……」と強がりを云つていたが、やがて罪状を段々打ち明けて罪をわびるようになつたと伝えられました。そこに自分の犯した罪に自暴自棄におちた者も、どうあろうとも捨てはせぬぞ、との親の心にふれて、堅く閉じた心の扉も開き、懺悔の身と転じたのであります。

以上の例に見るよう、善悪をこえて、どうあろうともお呆れのない眞実の同情者のまこと心にふれる時、闇い凍りつめた心の底に、光りと温かみがとどいて、しつかりと塞ざされた心の扉もひらかれ、はじめて慚愧の心も自然におこるのであります。

しかし、地上の人は皆別れねばならず、亡くなつて行きます。またその念力にも人間としての限界があり、それを越えますと、底のない絶望の淵におちこむのがその定めであります。独り生れ、独り死に、独り来り、独り去る、三界孤独の身と仏がかねて仰言つた通りであります。

念佛の大悲

天竜小唄に、人々によく知られた、

かけてやりたや かけてやりたや 桧傘

「清、お前がたとえどんな悪いことをしていよとも、

親子じゃからなあ、決して見捨てはしないぞ」

と告げた時、さすがの彼の眼にも涙があふれた。次の日

持たせやりたりや もたせやりたりや 蛇の目傘

というのがあります。学校を卒えた子が人生の初旅に、筏にのって急流の天竜川を下るのをじっと見つめる母の心であろうか、と池山先生が仰言ひ、又そのまま如来聖人のおこころともとれると云われました。人生五十年か百年、その流れに棹さす時、無数の水しぶきがかかります。そうした時、親兄弟とか、友人恩師とか、いろいろな人々に護られて、慰めはげますのであります。いよいよ大きな問題に会うと、何人の手もどかず、声もきこえなくなります。

この時、完全に水しぶきから護られるのは蛇の目傘、即ち大慈大悲の仏心のおまこと一つであります。諸仏や高僧方は、この仏心一つを私共にとどけてやりたい一杯であらゆる御苦労を続けて下さっています。

しかし、我慢我執にかたまつた私共は、行きつまつていながら、いつかはどうにかなろう、待てば海路の日和もあると、勝手のよい予想を持って、聖人の方の声に耳を借そうとしません。經典に「諸々の衆生のために不請の友となつて人々の責任を荷負して下さる」とも「大悲心をおこして衆生を愍んで、慈語をもつてそだてて法を知る眼をあたえ悪道をふさいで善道に導くために不請の法を人々に施して下さる」とあります。

来ました。朝になつて子供を見ると、昨夜とは打つて變つておだやかになっているのに驚かれました。

又、Hさんは、幼い自分と妹をおいて実母が去り、その後次のお母さんが來たが、その母に子供が生れるにつけて繼児、繼母のへだてがおこり、それが段々とげしくなりました。Hさんはその後、〇市の高校に入学したが、妹と別居するにつけ、慰めてやることも出来ず、そのことが苦になり、心がすさまじく勉強も出来なくなりました。そこで、運動したり、音楽を習つたりして心を変えようとしても無駄でした。やがて大学に入りました、キリスト教を聞き、そこに光を見出そうとしましたが、敵を愛し、隣人を愛するといふことも出来ず、とうとう酒で誤間かすというようなすさまきつた生活におちました。

そうした時、三誓偈の一句「我無量劫において大施主となりて諸々の貧窮を救わば正覺を取らじ」がフト耳に入り貧窮となるが、自分こそ大学に通つてゐるもの毎夜苦しみを酒で誤間かさねばならぬ生活、恩師や友人にも心配のかけ放して、親をにくみ、のろう生活、これこそ貧窮そのものであるが、この者を救わば、御自身に仏となるまいとまで誓つて下さる方がましますのかと驚いたのであります。その後、歎異抄をくりかえし拝読されているうち

この仏心こそ「攝取不捨」のみこころそのままであります、よるべなき世に、唯一無二のよるべを恵んで下さるのあります。今ここに、この仏心におさめられて、信の旅をせられる人々をあげましょう。

ある奥さんが、御主人の留学中に、子供さんが、大学入試に失敗してから自暴自棄におち、警察の厄介にもなりかねない有様になり、夙夜心の安んずる時もありませんでした。そうしたある夜更け、酒に酔いしれて帰った子に、今夜こそ思いきり注意しようとする「ああくたびれた、もう寝る」と云つてゴロリと横になって高いびきをするという始末であります。思いあまつて、じつと側らに坐つていた奥さんの口から、かねてお聞きしていたお念佛がもれました。その刹那に、

「この子を親不孝の困り者と責め続けて来たが、この子がこうなつたのもここ数ヶ月のことであった。自分自身が、久遠の御親にましますみ仏のこころも知らず、そむいて来た長い年月の間、御心配をかけっぱなしで来たことにくらべると、この子の反逆などは問題でなかつた！」この子によつて自分の浅間しい姿を知らされた、南無阿弥陀仏、々々々々

と心がひらけ、始めてグッスリと奥さんも寝むことが出

に「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、惡人成仏のため云々」のおこころにふれて、そのまま念佛の人となりました。

そこに仏の大悲心にあたためられて、親を思いかえされた時、自分のことばかり考えて親の身にすこしもなつたことはなかつたが、西東もわからぬ自分と妹を残して去つた母も千本の槍でつかれるよりもつらかつたであろう。又父も再婚して自分達のひがみを見てどんなに悲しかつたであろうか。繼母に対しても、母という名のものとて実母の愛を要求して、反抗し続けたことのあさましさ等々、お念佛の中に大懺悔の生活がひらけたのであります。

地上に生をうけて、私共の全体をすべて理解して下さつて、どうあらうとも呆れず捨てたまわぬみ仏がましませばはてしない生死動乱の世にあるまんま、それに隨順して越えて行くことが出来ます。しかもこのみ仏は、私共の煩惱と罪業にまつわれて浮かぶ瀬のないことを憐んで下さつて救いの御手をさしのべて下さるのです。

仏陀降誕の聖月、超世希有の大悲大願を仰ぎ、仏恩を謝しませました。

あとがき

鶯のお山の桜花、昔のままに匂うなり、
鶯のお山の時鳥昔のままに云々と、童男童女
の誕生仏をめぐって合唱する花祭りがま
いりました。新しいものゝを追い求め

て、そのまんま陳腐して行く世に、永遠の
光明となつて日々に生きくと新しく輝く
御教をあらためて讀仰申すことであります。

本月は近角先生の「親鸞聖人の信仰」を
これから續いて頂くので最初の一節を頂き
ました。先生をとおして聖人の法雨に溶さ
せて頂きました。
又「慈悲の觀音」の福島先生の稿は、聖
人が聖徳太子を通じて救世觀音菩薩を渴仰
していられるについて、觀音菩薩の御心を
知らせて頂くよがといたしました。

榎原様の御心づくしの一道会の記もこれ
で終りましたが本秋の一道会がまたれます
ことあります。

山本晋道師の、忿仏即懺悔即感謝につい
て才市同行の

悪がしられにや仏もしれぬ
悪がしられりや仏もしれる
悪と仏は一つもの
それが六字の南無阿弥陀仏
あさましやあさましや
ありがたやありがたや
の法味あるうたを思い併せました。

御案内

法然聖人の御晩年の御詞に

「念佛の興行は愚老一期の勸化なり。さ
れば念佛を修せんところは貴賤を論ぜず、さ
海人漁人が苦屋までも、みなこれ子が遺跡

なるべし」

とある。そこには遺跡として廟所さえも

求めておいでになりません。あとをこのよ

うに消される聖人の德光は念佛と共にあま

ねく万人の上にあらわれて下さるのであり

ます。聖人の御臨末の書と称せられる中にも

「一人居てよろこば二人と思ふべし、二

人居てよろこば三人と思うべしの一人入

は親鸞なり」と、何時でも何処でもお念佛

の中に聖人にお会いさせて頂けますこと

は、何とありがたいことであります。

か。形あるものはこわれます、形のみに目

をむけて血眼になつてゐるところには聖人

の方はおいでになりません。かと云つて、聖

人の御跡を粗末にしてよいと申すのではな

いませんが、聖人のみこころをあらため

て仏誕生の聖月に渴仰申すことでありま

○ 一道会例会。毎月第一、二、三日曜、午

後一時半。
地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

市バス新郊通一丁目下車、東に入る三筋
目、左に入る。

地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 昭和区小桜町二丁目四。

市バス。名駅前より⑤妙見町行き、曙二
丁目下車。

⑦妙見町行き御器所通下車。

栄より、松中(いりなか)行き、北山下
車。

○ 一道会例会。毎月第一、二、三日曜、午
後一時半。
地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

市バス新郊通一丁目下車、東に入る三筋
目、左に入る。

地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 昭和区小桜町二丁目四。

市バス。名駅前より⑤妙見町行き、曙二
丁目下車。

⑦妙見町行き御器所通下車。

栄より、松中(いりなか)行き、北山下
車。

○ 一道会例会。毎月第一、二、三日曜、午

後一時半。
地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

市バス新郊通一丁目下車、東に入る三筋
目、左に入る。

地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 昭和区小桜町二丁目四。

市バス。名駅前より⑤妙見町行き、曙二
丁目下車。

⑦妙見町行き御器所通下車。

栄より、松中(いりなか)行き、北山下
車。

○ 一道会例会。毎月第一、二、三日曜、午

後一時半。
地下鉄、新瑞橋終点下車。徒歩十五分。
○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

足利 浄円師

我迷う故にわれありまた仏まします。
唯佛共仏の智見あるのみ念佛申す。

慈光社
名古屋市南区駒上町二ノ八八
振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七